JICA 教師海外研修 授業実践報告書

Zambia

学校名：大田区立馬込第三小学校

氏名： 堀江 理砂

［担当教科：家庭科,外国語,図書］

- 実践教科等： 家庭科
- 時間数 ： 11 時間
- 対象生徒 ： 第 6 学年
- 対象人数 ： 104 人

1 単元名

ザンビアと日本 共に生きる～食から考える～

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（国立教育政策研究所が例として示したもの）

- 日本とザンビア両国の食の特色を知り、他者の食を代表とする文化を尊重する態度を養う。（⑤他者と協力する態度）
- 両国の食の課題を知るとともに、その課題と自分の生活とのつながりを考える。（③多面的、総合的に考える力）
- 世界の課題を知ると共に、資源・教育・機会などの不平等な現状を知り、その解決方法を「自分事」として捉える態度を養う。（①批判的に考える力、⑤他者と協力する態度）
- 世界の諸課題は、自分の生活とつながっていることを知り、それらを自ら解決していく主体と考える態度を養う。（③多面的、総合的に考える力、⑥つながりを尊重する態度
- 世界の諸課題の解決は、自分の一歩から始まると分かり、その一歩を自分のできるところから行っていこうとする態度を養う。（⑦進んで参加する態度）

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点（国立教育政策研究所・2014）

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る	2 子供の多様な考えを引き出す
3 考えを深めるために対話のある活動を導入する	4 考えるための教材を見極めて提供する
5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する	6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る	

・授業の最初や途中に子どもが考える問いを発問する。【1】
・「貿易ゲーム」を思い出させ、そのときの気持ちを発表させる【4】
・これまでの学習を振り返る。その際、事前のアンケートも配布し、自分の意識の変化も知る【6】
・個人の振り返りをペア、班内で交流し、学級全体に発表する【3】【7】

4 単元の指導について

（1）教材観

●ねらい

本単元は、小学校家庭科の単元内容を基礎として、発展的学習として行った。発展的学習の展開をしたのには、以下の 3 つの理由からである。①新学習指導要領において、食育をいっそう推進する、また、消費生活や環境に配慮した生活の仕方に関する内容の充実が挙げられている。②新学習指導要領では、グローバル化や持続可能な社会の構築等に、主体的に対応することが求められている。③本校ではオリンピック・パラリンピック教育の推進を、学校教育目標に挙げており、本単元で国際理解教育を行っていくことをねらいとしている。

●既習内容・その後の学習内容との関わり

・日本の食糧自給率や地産地消の意味は、5 年生の社会科で既習である。日本の主食がお米であることは、5 年生の社会科で知識として学習し、5 年生の家庭科で調理実習を行っている。
・中学校家庭科の「環境に配慮した消費生活の工夫と実践」の学習につながっている。

（2）児童生徒観

授業前のアンケートから、【食育について】－食糧自給率は既習内容だが、日本の自給率を正確に（近似値も含め）知っている児童は少ない。食べ物を残すことについては、家でも学校でもあまり多くない。給食の残菜もこの 6 年生は少ないのが実態である。【国際理解について】－興味をもっている児童は過半数を超えるが、ザンビアについては、知っていることはなかった。また、アフリカについて

のイメージも「暑い、野生動物、象、サバンナ、黒人」と、自然や動物などが圧倒的に多く、人の息づかいを感じる回答はなかった。【食べ物を満足に食べられない人がいることに対してできること】については、自由記述にも関わらず、「（ユニセフ）募金」が最も多く 72.3%もいた。毎年のユニセフ募金の取り組みの印象が強いのだと感じた。一方、「できることは何もない」は 8 人、7.9%いた。【国際的な課題と自分の生活】－具体的記述では「北朝鮮のミサイル」と「地球温暖化」という記述が数人ずつで後は白紙だった。具体的なはっきりした認識はもっていない児童が大半だと思われる。【国際協力に関わりたいか】－《分からない》が最多であるのは、イメージがつかない、ということであろう。《関わりたくない》というはっきりした拒絶の児童の、この単元学習を通じての変化を後述する。

５ 評価規準

	家庭生活への関心・意欲・態度	生活を創意工夫する能力	生活の技能	家庭生活についての知識・理解
評価規準	・他国の文化に関心をもつ。 ・国際的な課題について関心をもつ。	国際的な課題について、自分事として捉え、自分の生活での解決方法を考えることができる。	日本やザンビアの主食を安全に調理することができる。	・日本や他国の食の特色・課題を知る。 ・国際協力の必要性について分かる。
評価方法	・プリント ・ワークシート ・活動の態度	・プリント ・ワークシート	・実習中の態度 ・ふり返りシート	・プリント ・ワークシート

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
	事前アンケート	児童の事前の知識・考えを知る。	ザンビア・アフリカ・食糧廃棄についての知識、国際協力についての考えを記入。
1	ザンビアを知ろう	ザンビアの位置・歴史・文化をザンビアの方から教わる。	JICA ザンビア研修員さんの講演を聞く。
2	ザンビアの食を知ろう	主食のシマとおかずの作り方を知る。	調理の手順を知る。 班内で調理の分担をする。
3～5	シマとおかずを調理しよう	主食のシマとおかずを安全に調理する	班毎にシマとおかずを調理する。 チテンゲをテーブルクロスにして試食する。
6	食の特色・課題を知ろう	両国の食の特色・課題から世界的な食の問題について知る。	両国の食の特色を食料自給率・栄養バランスから知る。日本で食糧輸入が止まったら、どんな食事になるか知る。 食が足りているのに栄養不足な人がいる一つの原因にフードロスがあることを知る。
7	フードロスとは	フードロスはどのように起こるのかを体験的に考えよう	体育館での「フードロス鬼ごっこ」を通して、フードロスが起こる原因と1/3 もの食料が廃棄されることを知り、考える。
8 9	世界の仕組みを考えよう	「貿易ゲーム」で、世界の不平等な仕組み、様々な立場の人の思いを考える	「貿易ゲーム」 ふり返りを通して、資源や教育や技術の偏りや不平等を実感すると共に、どのような世界がよいのかを考える。
10	世界の課題と自分の生活のつながり	国際的な諸問題は、「他人事」ではなく、自分事と考える必要性を理解しようとする。	食糧援助＊２＜食糧廃棄であることを知る 国際的な課題は、自分の生活と切り離せないことを知る。 3.11 後に日本は最大の被援助国になったことを知る。 「自分事の時代」「地球という一つの船の乗組員」
11	自分にできることを考えよう	フードロスを減らす取り組みなどを知り、自分にできることを考える	本校の給食の残菜量を知る フードバンクの取り組み（全国、大田区）を知る これまでの学びの振り返り

7 授業事例の紹介

小単元名【世界の課題と自分の生活のつながり】

（1） 指導案

（ア）実施日時 11 月 10 日（金）第 3･4 限

（イ）実施会場 6 年 3 組教室

（ウ）本時の目標

国際的な諸問題は、「他人事」ではなく、「自分事」と考える必要性を理解しようとする。

（エ）指導のポイント

・一方的な講義だけにならないよう、今までの学びや活動を想起させる発問を行った

・動画を入れることで、分かりやすく、また集中が途切れないようにした

（オ）本時の展開

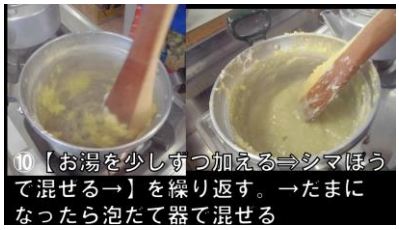
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
5分	8億1500万人という数字は何を示しているでしょう？【1】	・数字から推測する ・世界での栄養不足（飢餓人口）だと知る	講義形式	9人に1人というヒントを出す	●関心・意欲・表現（挙手）
5分	世界の食料は足りていないのだろうか？【1】	食料が足りていないために、9人に1人が飢餓状態にあるのか考える 穀物年間生産量と世界人口を割ると、食料は十分にある、と知る		飢餓の人がいるのだから、当然足りていないのか、その他に原因があるのかをこれまでの学習と結びつけて考えさせる	●関心・意欲・表現（挙手）
10分	食料は十分にあるのに、なぜ、飢餓状態の人がいるのか？【1】	いくつかの原因を知る 世界と日本の食糧廃棄量を知る 食糧廃棄の実態を動画で知る		原因の一つ一つは、簡単に説明をする	●関心・意欲・表現（挙手）
5分	食糧廃棄	世界の食糧援助の2倍の量が廃棄されていることを知る	動画視聴	様々な食糧廃棄の実態や現場の様子を短い動画に編集して視聴させる	
5分	食糧援助と食糧廃棄の量	援助が必要な国は、どうして必要になるか考える			
5分	援助を必要とする国は、なぜそのような状態なのか	2011年に日本に起こったことを考える【1】		「貿易ゲーム」を思い出させ、そのときの気持ちを発表させる【4】	●関心・意欲・表現（挙手）
10分	援助は必要か	日本が最大の被援助国になったことを知る			●関心・意欲・表現（挙手）
5分	自分事の時代	世界の課題は他人事ではないことを考える			
5分	本校の給食の残菜量のグラフ提示	グラフを見て、何かを考える	動画視聴	大田区での取り組みを伝える。自分の家のストックを想起させる。	●創意工夫する能力（振り返りシート）
5分	フードバンク	フードバンクの取り組みを知る			
25分	まとめ【6】	これまでの学習を振り返り、自分事として何ができるかを考える	個人 ペア 班		●創意工夫する能力・表現（発表）
10分	まとめ共有【3】【7】	自分の思いをペア、班で共有し、学級全体に発表する。	全体発表		

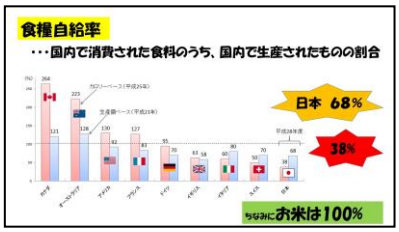
（2）授業の振り返り

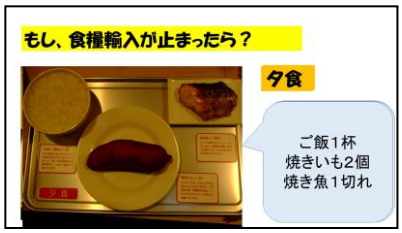
・本時においては、講義形式指導が中心になってしまったのが課題である。しかし、児童はこれまでの 9 時間において、講義形式と調理実習や体育館での鬼ごっこ、貿易ゲームなどで活動を交えての展開により、集中力がよく保たれていたと感じた。パワーポイントの講義に、何本かの動画を短く挿入したことは、集中力を保つことに効果的であった。単元全体を通して指導形態に変化をつけることが大切だと感じた。

・前日の 6 年 1 組の授業において、パワーポイントのデータの作成ミスで、「2011 年に日本で起こったこと」の答えがすぐに出なかった。結果、児童が考える時間が出来たことで、思考を深められた。改めて、全てを提示するのではなく、発問や問いを効果的に児童に問いかけることで、児童の考えを引き出し、また、深めることができると分かった。本時では、その点を何点か修正して行った。

（3）使用教材







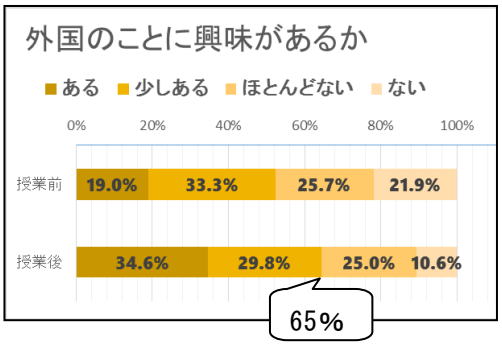
（4）参考資料等

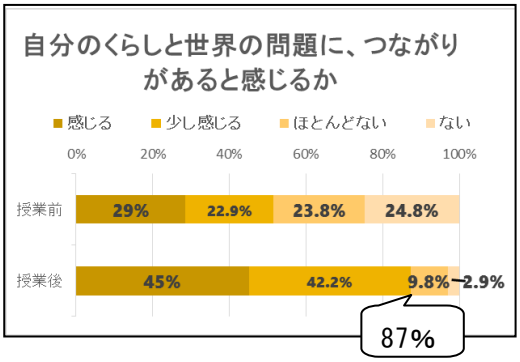
『世界の農業と食糧問題のすべてがわかる本』八木宏典監修、株式会社ナツメ社、2013 年
『食料の世界地図』大賀圭治　監訳、丸善出版、2009 年
『NATIONAL GEOGRAPHIC　地球と食の未来』日経ナショナルジオグラフィック社編集、日経ナショナルジオグラフィック社、2016 年
『地球の食卓　学習プラン 10』特定非営利活動法人開発教育協会、2017 年
『フードマイレージ　どこからくる？私たちの食べ物』特定非営利活動法人開発教育協会、2010 年
『新・貿易ゲーム』特定非営利活動法人開発教育協会、2006 年
『世界から飢餓を終わらせるための 30 の方法』ハンガー・フリー・ワールド編著、勝俣誠監修、合同出版、2012 年
『朝日新聞』2017 年 5 月 18 日朝刊、「教えて！SDGs 4食品ロスを減らすには？」
『朝日新聞』2017 年 3 月 22 日朝刊、「SDGs で変える　もうパンは捨てない」
『朝日新聞』2017 年1月 31 日朝刊、「食糧廃棄、削減に挑戦」
WFP「世界の飢餓状況」 http://www.wfp.or.jp/kyokai/hunger.html, (2017/09/02 閲覧)
WFP「子どもページ　飢えのない世界を」http://ja.wfp.org/students, (2017/09/02 閲覧)
Hunger free world,「世界の食料事情」 http://www.hungerfree.net/hunger/food_world.html#world01, (2017/09/02 閲覧)
セカンドハーベストジャパン「フードバンクの仕組み」 http://2hj.org/vision/problem/(2017/09/03 閲覧)
KSB 瀬戸内海放送　ニュース特集『食べられるのに廃棄　“食品ロス”を減らすには』(2016/02/17)
WWFドイツとUNEP（国連環境計画）とFAO（国連食糧農業機関）との合作『WASTE　～　食料廃棄、環境への影響』、2014 年
ヨコハマR（リデュース）委員会『REDUCE THE FOOD LOSS　小さな食卓の大きな話』、2014 年
『もったいない！』予告篇　監督：バレンティン・トゥルン　配給：T＆Kテレフィルム、2011 年

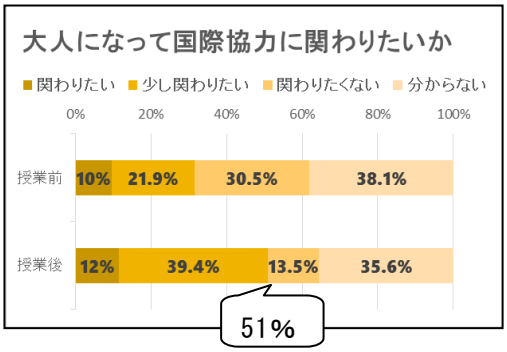
8　単元を通した児童生徒の反応/変化

単元後にアンケートを行った。①ザンビアやアフリカについて印象に残ったことの自由記述では、シマを初めとし食べ物のことや言語を初め、様々なことが記入された。アフリカに暮らす人の息づかいを感じられる記述に変化した。②日本の食糧自給率を正しく（近似値含む）答えられたのは、95人、91.3%であった。③国際協力や援助について、興味が増えたかは《増えた》が 30 人、29.1%、《少し増えた》が 46 人、44.7%④自

分のくらしと世界の問題につながりがあると感じるかは、《ある》が 80 人、《少しある》が 12 人と、合わせて 88%であった。
授業前と授業後の比較は、右参照。(1)外国のことに興味があるか(2)自分のくらしと世界の問題につながりがあると感じるか(3)大人になって国際協力に関わりたいか
以上の結果から、【食育について】ー食糧自給率について、90%以上の児童が日本の自給率を正確に(近似値も含め)答えられようになり、フードロスについて、また、世界の食に関しての課題もこたえられるようになった。【国際理解について】ー65%以上の児童が外国に興味が増え、また、アフリカについてのイメージも豊かになった。【国際的な課題と自分の生活】ー自分の生活と世界の課題がつながっているという認識は、90%以上の児童がもつようになった。【自分に出来ること】—普段の自分の生活が、今は国際的な課題につながっているということを認識するようになった。【国際協力に関わりたいか】ー《関わりたい》《少し関わりたい》が合わせて50%を超えた。《関わりたくない》というはっきりした拒絶の児童が、32 人から 14 人に減少した。







【アンケート自由記述より】
「他の国に全く興味がなかったけど、この勉強ですごく興味をもち、国際協力について、もっと勉強したくなった」「自分の残す給食だけでなく、賞味期限の長いもの、形のよいものを買いたい、という普段の行動が世界の課題につながっていると知って、驚いた。」「この勉強で、紛争や戦争、テロをなくしたい、と強く思った」「フードロスや貿易など、言葉が難しかったけど、鬼ごっこやゲームで楽しく学べて、よくわかった」「他の人が食べているものについて、「きも」とか「まずい」と言うのは、失礼なんだと分かった。それぞれの食べ物を大切に思うようになった」「東日本大震災のときに、世界の人、日本より貧しい国の人も援助してくれたことに、驚いたし感動した。世界はつながっていると思った」「世界の国々はばらばらだと思っていたけど、「地球という一つの船に乗っている」というのが分かった」「これからは、いろいろな国について興味をもって、関わっていきたい」「貿易ゲームで言い争いをする班と、同盟を組んで協力する班があって、それが、戦争になるんだな、と思った。相手のことも考えながら、話し合いをして仲良くすることが平和につながると思った」「貿易ゲームをして、他の班にすごくイラッとして、けんかもした。こうやって、テロや戦争が起こるんだな、と思った。平和に話し合うことが大切だと思った」「貿易ゲームではさみがなくて困っていて、やる気がなくなった。でも、無償援助ではさみを貸してもらって、やる気が出た。それを他の国と協力して共有した。テロが起きそうになるのや、平和を実感した」「貿易ゲームで不公平を実感した。みんなが幸せになるには、相手への思いやりをもって、協力したり話し合ったり仲のよい国をつくることが大事だとおもった。北朝鮮とも仲良くしたい」「不平等だとよくない。平等にすると戦争がなくなると思った」「無償援助をする国連が大切だとおもった」「自分の国の利益ばかり考えないで、技術を共有したり、相手にもプラスになるように交渉すれば、世界が平和になると思った」

●授業前の児童は、ザンビアのことを全く知らず、国際的な課題にも興味関心は高くなかった。学習を通して、他国の食事がおいしく感じなくても、他国の人の大切な主食であることを考え、「まずい」ではなく、「口に合わない」と言うなど、他者・多文化尊重の気持ちをもつことができた。国際協力・援助の大切さを、学習を通して感じ、「自分の都合だけでなく、相手のことも考えながら思いやりをもって協力することが、世界中の人が平和に暮らせることだと分かった」と、考える児童もいた。フードロスについては、各自それぞれが残菜を減らすだけでなく、生産や流通でのフードロスを減らすための自分の行動まで考えようになった。国際的な課題を、「他人事」ではなく「自分事」として考えるべき理由について、学期末テストで91%の児童がその根拠を具体的に挙げて答えることができた。外国のことに興味をもつ児童が 52%から 65%に増え、大人になって国際協力に関わりたい児童が 32%から 51%に増え、「関わりたくない」という児童が 30%から 13%に減ったことは、児童の国際理解認識が高まったと考えられる。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】

他国への興味関心が全くなかった子も、実習やゲームを通して「楽しく」学ぶことが出来、他者や他国や他文化を尊重する態度が養われ、自分の生活と世界の課題がつながっていること(【自分事の時代】)を実感し、自分の生活の奥に世界が広がっていることを認識するようになった児童が多くいた。そして、将来、「国際協力にたずさわりたい」という思いをもつ児童が増えた。

世界中の人が幸せになれることが大切、という意識が高まり、平和であること、それが努力によってなりたつことに感謝をし、平和を自分達で築こうという意識が芽生えた。

「音楽会」での『アフリカシンフォニー』を演奏でアフリカの布や太鼓や打楽器を使い、アフリカへの理解を元に表現力が高まった。

【課題】

教師海外研修で得たことを精選しながら、単元を構成したが、講義形式で盛りだくさんになってしまった展開になった感は否めない。今後の単元構成作成時には、より精選をしていきたい。

今回は、SDGs を学習に取り入れることができなかった。「自分事の時代」という意識をもたせるときに、SDGs を切り口にするのが非常に有効である。今後は SDGs の考えを学習に取り入れることで、さらに「自分事の時代」の考えを深める学習を展開していく必要を感じている。

10 教師海外研修に参加して

JICA 教師海外研修の派遣をきっかけに、自分自身が「国際理解教育とは」「共生とは」「どの国も幸せになるには、どうしたらいいのか」などをこれまで以上に深く考え、また、教師生活 15 年間で、断片的に実践してきた国際理解教育実践も視点をもち、深く教材研究を行った。

目分量しかないシマの作り方をレシピ化する苦労や、ザンビアの絵本が探せなかったことから、ザンビアは「書き留める」文化ではないことを実感した。

今回は、家庭科の「食」を通しての国際理解教育で、小学校家庭科の教科書にはもちろん掲載していないことだが、新指導要領で小中高の家庭科内容縦断がいわれていることやオリパラ教育として国際理解教育が推進されていることで、校内でも実践を歓迎されたことは幸運だった。

「先生、これって平和が大切、っていう勉強だね」という児童の言葉通り、他国を尊重し、相手を思いやり、紛争ではなく話し合いが大切であるということを小学校のうちに実感することが、隣の他者である友人関係にも反映されるのはもちろん、今後の学びの礎になり、とても有意義であると考えている。今年だけの実践に終わらず、今後もさまざまな視点から、国際理解教育実践を続けていこうと考えている。

なお、5 年生 3 学級には 2 時間「ザンビアと日本をくらべよう」、2 年生 4 学級には 1 時間、3 年生 3 学級には 2 時間で、「外国を知ろう」という単元名で、国際理解教育を行うことができた。また、音楽会では、6 年生が『アフリカシンフォニー』を合奏し、その際、21 人がチテンゲを巻き、ザンビアの太鼓や楽器を奏でることで、全校的に国際理解の学びが深まったことにも感謝したい。